

厚生労働科学研究費補助金（免疫・アレルギー疾患政策研究事業）

分担研究報告書

アレルギー疾患医療の質および経年推移の可視化と、アレルギー疾患対策基本法に基づく政策的介入効果の評価法の開発に関する研究（アレルギー性鼻炎）

研究分担者 坂下 雅文 国立大学法人福井大学・学術研究院医学系部門
（附属病院部）・医学研究支援センター・講師

研究要旨

本研究では、舌下免疫療法（SLIT）の処方実態および継続状況に着目し、アレルギー性鼻炎（AR）診療の標準化に向けた評価指標の設計を目的とした。森田班による全国処方動向データを基盤に、当班では都道府県別・年齢群別の SLIT 導入率と継続率を分析し、地域間差異の構造と医療提供体制の特性を明らかにした。これらをもとに、標準治療の普及度を反映する構造的指標案を検討した。

A. 研究目的

本研究の目的は、アレルギー性鼻炎に対する SLIT の普及状況および継続状況の地域差を可視化し、医療の均てん化・治療標準化の進捗を定量的に評価する指標を開発することである。特に重症 AR における標準治療導入率および継続率を、人口規模や医療資源配置と照合し、診療体制の課題と改善余地を明らかにすることを目指す。

B. 研究方法

2018 年から 2021 年までの NDB を用い、スギおよびダニに対する SLIT 新規処方患者を抽出し、12 か月以上の継続処方を有する群を「継続例」と定義した。都道府県別・年齢群別の導入率および継続率を算出し、標準化人口（10 万人あたり）で補正したうえで地域格差を分析した。

C. 研究結果

ダニ SLIT は 2018 年以降 5-14 歳で著しく増加し、特に都市部の小児科・耳鼻科で多く処方されていた。一方、スギ SLIT は成人において増加傾向がみられた。都道府県別にみると、導

入率には最大で 4 倍以上の地域格差が存在した。継続率はダニ SLIT で約 60%、スギ SLIT では 50%前後であり、継続率の高い地域では診療所での導入率が高い傾向があった。

D. 考察

SLIT の導入・継続における地域差は、診療機関の分布や専門医の偏在といった、指導体制の整備状況に依存している可能性がある。重症 AR に対する治療の標準化達成度を評価するには、「推定重症 AR 患者あたりの SLIT 導入率」や「SLIT 導入例における 12 か月継続率」といった複合指標の開発が有用であると考えられる。特に継続率は患者指導やアドヒアランス支援体制を反映する可能性が高く、診療体制の質的評価に直結する指標となり得る。今後、重症群の定義および臨床アウトカムとの整合性を確保しつつ、標準治療普及度の定量評価を進めるべきである。

E. 結論

本研究では、SLIT の処方・継続実態を通じて、アレルギー性鼻炎診療の地域差と構造的課

題を明確化した。今後は、都道府県別の導入率・継続率を中核とした「標準治療普及指標」の確立を通じて、AR 治療の質保証と地域格差是正に資する科学的根拠を提供することが期待される。